

第8回区役所・サンプラザ地区再整備推進区民会議 議事要旨

【開催概要】

日 時：平成30年11月7日（水曜日）午前10時30分から正午まで

場 所：中野区産業振興センター 3階 大会議室

委員出席状況：出席委員23名（うち3名代理出席（米持委員→溝口委員、矢野委員→川村委員、田崎委員→南波委員））

欠席委員7名（宮脇委員、赤星委員、青木委員、吉成委員、渡部委員、小松委員、山口委員）

その他出席者：中野区5名

（酒井区長、松前副参事（中野駅周辺まちづくり担当）、石井副参事（中野駅周辺計画担当）、小幡副参事（中野駅地区都市施設調整担当）、江頭副参事（中野駅地区都市施設整備担当）、）

オブザーバー2名

（野村不動産株式会社 開発企画本部 開発企画部 開発課 課長 三輪氏、清水建設株式会社 プロジェクト営業推進室 プロジェクト営業二部 副部長 関口氏）

講師2名

草加 叔也氏（空間創造研究所代表）

笹井 裕子氏（ぴあ株式会社 ぴあ総研所長）

【議事要旨】

1. 開会

午前10時30分に開会した。

2. 議事

集客交流施設のあり方について

- ・草加氏より資料2を用いた講演が下記のとおり行われた。

（草加氏）

まず、わが国が目指す文化芸術振興の指針を説明する。平成13年に文化芸術振興基本法（平成29年に「文化芸術基本法」と改める。）が整備された。これは、日本において初めて文化芸術の振興について法律としてまとめられたものであり、文化芸術がどういう位置付けにあるか明文化された。法の中で、心豊かな国民生活及び活力ある社会の実現に寄与することを目的とすると書かれており、文化芸術は豊かな国民生活及び活力ある社会をつくるために振興するのであって、文化芸術が栄えればよいというだけの法律ではない。もう1つ大きいのが、文化芸術を鑑賞、参加することが国民の権利と明文化されたことである。この文化芸術振興基本法を基に、劇場、音楽堂等の活性化に関する法律という法が整備された。この法律は地方自治体が整備した施設に対し、網をかけるものである。また、公の施設だけでなく、民間の施設もこの法律の範囲にある。

平成29年に行われた文化芸術振興基本法の一部改正の大きな趣旨は2つあり、1つ目は文化芸術だ

けを振興させるのではなく、教育、福祉、観光、まちづくり、国際交流、産業その他の各関連分野における施策を法律の範囲に取り込むこと。要するに、教育、福祉等の関連施策という縦軸に対し、文化芸術という横軸を上手く使い、それぞれの施策を成就させることを目的としている。もう1つは文化芸術により生み出される様々な価値を文化芸術の継承、発展及び創造に活用すること。

次に、改正の概要として①から④まで上げられている。①は性別、年齢、国籍、収入等にかかわらず文化芸術の鑑賞ができる環境を整備するよう求めている。②は心豊かな国民生活、国際社会の調和ある発展につながるもの。③は文化芸術に能動的に活動する方がまだまだ少ないため、子どもたちに文化芸術を伝えていこうというもの。④は文化芸術の価値が国際交流等には欠かせないものと考えられているため、文化芸術を活かしていくことを求めている。

文化芸術基本法の中には文化芸術推進基本計画を作りなさいという努力義務が示されている。この法律が整備されて以降、地方自治体は計画策定に向け動いているところが増えている。また、文化芸術の体制整備として、政府の文化芸術推進会議に基づいて、地方公共団体が文化芸術を推進する会議等を設置することが示されている。設置するかは各地方公共団体の判断だが、文化芸術を推進していこうということが法律の中に明文化されている。

前述の法律を基に、劇場、音楽堂等の活性化に関する法律が整備されている。この目的は、文化芸術の中でも舞台芸術、音楽芸術、伝統芸能等を振興していく器として劇場、音楽堂等を活性化させていくために作られた法律である。現在、全国に公立文化施設だけで2200施設が整備されている。3300あった地方自治体が、平成の大合併を経て1750前後になっており、いつのまにか地方自治体より公立文化施設の方が多くなっている。劇場・ホールを整備する側としては、もう整備する場所はないと思っていたが、施設は新陳代謝をしっかりとしていないと段々と劣化していく。人間と同じように機能的な寿命を向えるため、いくつかの施設が建て替えの時期になっている。この劇場・音楽堂等の役割が法の第1条に示されている。また、劇場、音楽堂等の定義も第2条に示されている。ハードウェアがあり、そこに専門的な創意と知見のある人が配置されており、公演を企画し行い発信していくのが劇場の定義である。鑑賞させるだけが劇場の定義ではないと思う。

また、劇場、音楽堂等が行う事業について8項目掲げられている。1つ目が実演芸術の公演を企画又は行うこと。つまり、創造事業であり、舞台芸術、音楽芸術、伝統芸能は作るという行為がない限り作品にはならない。2つ目は施設提供に関すること。3つ目は文化芸術が必要であるということ、重要な価値があるということを普及啓発していくことが求められている。4つ目は近くのホールと共同して何かするだけでなく、人材育成している教育機関等も含めて一緒に文化芸術を振興していこうということが示されている。5つ目は、わが国だけで終わるのではなく、インターナショナルで行うということ。6つ目は資料を収集しストックし、記録を残していくのも重要ということ。7つ目は人材育成のこと。新しい施設を作った際に、既存の施設から2～3人ヘッドハンティングしてくるのではなく、その施設が必要な人材を育てていくことが重要である。人材養成というと演奏家や役者を思い浮かべるかもしれないが、もっと重要な舞台技術者やプロデューサー、制作者を育てていかないと劇場はサステイナブルに動かない。8つ目はダイバーシティや社会包摂的機能といったもの。性別、国籍、収入、障害の有無等の区別なく、すべての市民が参加できる権利がある。これが今、わが国が文化政策として目指しているところである。

どれくらいの人たちが舞台芸術、音楽芸術を鑑賞するのかを整理した。鑑賞の中で全国平均が一番大

さいのは演芸・演劇・舞踊鑑賞であり、100人中14.5人が一年で行っている。対して、鑑賞に比べ活動を行っている割合を見ると、数字は大きく減っている。東京都は全国平均と比べ大きく上回っている。鑑賞に関しては東京都が3つとも1番であるが、活動は神奈川県の方が高くなっている。趣味・娯楽の種類別行動者率についてだが、この数字も必ずしも伸びてはいない。演芸・演劇・舞踊鑑賞の数字は落ちてきている。音楽・歌謡曲は若干伸びてきている。

次に全国のホールの状況だが、平成7年に1年間で112館オープンした。バブルのころに計画した施設が、平成6年頃に竣工・開館している。対して、平成24年は4館しかオープンしていない。これから作る施設は、これからの地域の文化を担っていくのに大変重要な施設になっていく。今は2200施設あるが、あつという間に減っていく可能性はある。残る施設はどういうものか、これから作る施設の重要性を認識してほしい。また、都内の施設を並べたが、中野サンプラザは築後45年を経過し、築後50年以上経過している施設は6.6%しかないためかなり老朽化している分野に入っている。50年を経過すると機能や性能が劣化することによる建て替え、40年を超えると健康寿命が尽きはじめていく。2010年に東京厚生年金会館、2013年に普門館、2015年にはゆうぼうとが閉館した。この3館が閉まったことが2016年問題として新聞に取り上げられた。特に大きかったのは国立競技場が閉鎖したこと。これからポピュラー音楽に関しては有明アリーナや武蔵野の森総合スポーツセンターができるので、これから多少回復していくかもしれないが、大型の舞台芸術公演、特にバレエ公演等では会場不足が懸念されている。現在、都心で大きな役割を担っているのが文京シビック、新国立劇場、東京文化会館の3館である。

最後に中野サンプラザの再整備に対する個人的な期待を書いた。1つ目は文化や芸術を発信する拠点となってほしいこと。ホールだけでなく、その周辺に創造する環境や新たに文化に関心を持つ区民を育てるものになってほしい。次に、集客と交流を誘発する効果。文化や芸術が生み出す効果を、まちづくり、国際交流などにも活せる、相乗効果を持てる施設になってほしい。最後に、新たなまちづくりの起点になってほしい。駅前で山手線から数駅という距離にあるので、新たな都市整備にふさわしい外観（サンプラザの三角形というのはこのまちのアイデンティティだと思う。）、機能を備え、魅力ある都市整備の起点となってほしい。

・笹井氏より資料3を用いた講演が下記のとおり行われた。

(笹井氏)

実際にライブ会場・劇場・ホールを利用するエンタメ業界のデータを紹介する。

まず、ライブ・エンタテインメント市場は2000年から2017年の間に約2倍に拡大している。特に、音楽が2012年以降急拡大しており、2012年から2017年で1.5倍ほど伸びている。また、市場規模が年々拡大してくなか、2016年だけ微妙に下がっている。これは、ライブ会場不足の2016年問題であり数年前から問題提起はしていたが、実際に数字も下がった。ライブ会場不足はまだ続いてはいるが、2016年は横浜アリーナ、さいたまスーパーアリーナで約半年間の大規模な改修が重なってしまったのが影響し数字に表れた。

音楽市場でみると、音楽ソフト生産金額と有料音楽配信売上の合計は、かつてライブ市場規模と大きな差があったが、2015年に規模が逆転し、今はライブの方が大きくなっている。音楽業界ではかつてCDを売るプロモーションとしてコンサートを行っていたが、CDが売れなくなった今はライブを軸

にグッズを売ったりメディア展開したりしているため、ライブの重要性が上がっている。

ライブの入場料収入は動員数×1人当たりのチケット単価で出している。音楽の1公演当たりの平均動員数は伸びてきており、市場規模を拡大させている要因となっている。さらに、単価も少しずつ上昇している。公演規模の拡大と単価の上昇があいまって、市場規模の上昇もたらされている。

ライブ・エンタテインメントの内訳は59%をポップスが占めており、年々市場が伸びてきている。また、ポップスの動向が動向を大きく左右する形になっている。ポップスに次ぐものがミュージカル、演劇となっている。2001年から2017年までの各ジャンルの市場規模を指数化したものでも分かるように、ポップスが2012年から急成長している。他のものでは、ステージでお笑いが伸びてきている。また、演劇も伸びてきている。

次にポップスの公演回数、市場規模を会場規模別に示したもののだが、1万人以上の会場で開催されるものは全体のほんの僅かしかない。しかし、市場規模で見ると1万人以上が大きなシェアを占めている。ライブ・エンタテインメント市場の興行規模の拡大が起こっているのは、1万人以上の公演が及ぼす影響が非常に大きい。2016年に市場規模が減ったのは、1万人規模の公演が2015年の1,080回から987回に減ったことが影響し、2017年は1,044回に増えたため、市場規模も戻った。また、1千人未満の公演回数は非常に多いが、市場規模に与える影響は少ない。1千人から1万人未満は公演回数もある程度あり、市場規模もそれなりな存在感を示している。

次の表は、国内ポップスの興行規模ランキングである。2016年と2017年を示しているが、傾向としては、ジャニーズ事務所に所属のアーティストは例年上位を占めている。後はEXILEのグループも上位を占めている。また、ベテランのアーティストも入っている。来日ポップスについては、韓国のアーティストが圧倒的に市場規模の中で上位を占めている。ポール・マッカートニーなどはチケットの単価が高いためランキングに入っているが、基本的には韓国のアーティストが占めている。

最近のトレンドとして、ポップスの中でアニメ関連ライブや2.5次元ミュージカルの成長率が高い。まだ市場としてはそれほど大きくはないが、高い成長率を示している。アニメやゲーム由来のライブには、若い世代が多く行っている。

ポップス市場の成長を支えているのは、ジャニーズ事務所等のアーティストの活躍、アニメ・ゲーム由来のライブやイベント、ベテランアーティストの周年記念イベント、バンドシーンの活況等の国内ポップスと、来日ポップスの韓国コンテンツやチケット単価の高いベテランアーティストの活躍等がある。また、フェス市場も多様化しており好調である。

参考としてポップス以外のジャンルであるミュージカル・演劇を紹介する。ミュージカルがポップスほど急成長しないのは、会場の制約を受けるのが要因にある。ポップスは屋外や大規模スタジアムでも行えるが、演劇はある程度決まった中でやることになる。劇場が閉館していく中、頭打ちになっている。ミュージカルの中身は劇団四季と宝塚が毎年上位をしめている。演劇ではジャニーズ事務所のタレントが主演しているものが上位にある。

これまで紹介したもの以外に、新しいタイプのコンテンツも増えてきている。映画の本編映像を観ながらオーケストラの生演奏を楽しむものや、クラシックの演目をゲームやアニメの音楽にしている公演もある。その他に、座って観ているだけでなく観客が動いて作品に参加するものもある。

ライブ会場不足で供給できない状況にならないよう、ライブ会場が整備されていくことをライブ・エンタテインメント業界は期待している。中野サンプラザは今現在もライブで多く利用されているが、よ

り素晴らしいものが整備されることに期待している。

・講演後、以下のとおりパネルディスカッションを行った。

(石井副参事)

現在の中野サンプラザのホールの施設や音響の評価あるいはアーティストや業界の評判はどのように考えられているか。

(草加氏)

建物は特徴的であり、まちのアイデンティティになっている。あの三角形の外観を見ると中野だと思う。ホールについては、昔から電気音響を活かした音楽を指向するという国内でも珍しい特徴を持った施設であり、これも1つの中野らしさのホールとして価値があると思う。しかし、舞台芸術にとっては舞台の奥行、間口も含め非常に厳しいホールであり、必ずしもホスピタリティが高いとは思はない。どういう規模にするかも含め、今後どういうホールを指向していくかという時に365日ポピュラーで埋まるかということを考えなければいけない。1つの中心に据えるコンテンツとしては、ポピュラー音楽というのが中野らしいと思う。

(石井副参事)

音響が良いという話を聞くことがあるが、それについてはどう思うか。

(草加氏)

クラシック音楽でいう生音の響きとかではなく、スピーカーが多くあるため電気音響が充実しているのと、ポピュラー音楽公演では機材を持ち込むことが多いので、それが自由にできるホールという意味では良いホールだと思う。

(笹井氏)

多様なものが公演されており、アイドルの聖地というイメージが付いてきている一方で、ベテランのアーティストも公演している。また、これから駆け上がっていく若手もあり、非常にポップスにとっては使いやすい施設である。会場の使用料がリーズナブルなものも使いやすい要因かと思う。また、観客にとっては昔サンプラザで何か観たという思い出が残っていたり、アーティストにとってはサンプラザで公演するのが1つの成長のステップアップであったりという感情面のところでも、大きなブランド力を持っている。

(石井副参事)

中野の立地特性、今後の市場の中でどういう位置付けにあるか伺いたい。

(草加氏)

例えば、東京ドームは東京の真ん中にあり地理的には非常に強い。埼玉、千葉等どこからも等距離にある。山手線の内側は確かに強いが、中野は中央線の快速で1駅なのでほぼ近似的な距離である。大きなアリーナみたいなものを考えると、こんなに強い立地特性はない。演劇やミュージカルにとってもこの距離は苦にならない。特に、駅に隣接しているのが良い点である。都内でも駅から雨に濡れないで行けるホールはあまりない。自宅近くの駅に入れば濡れないで行けるホールは非常に評判が良く、それだけでも強い集客力がある。

(笹井氏)

立地でいうと東京国際フォーラムも非常にアクセスが良く高稼働率になっている。アクセスの良さは

観客にとってもライブ・エンタテインメント側にとっても大きなポイントになる。中野はその点で、都内の他の同規模のホールよりも優位であると思う。

(石井副参事)

ホールや文化施設で更新や新設が上手くいかなかった事例や地域と上手くやった事例があれば伺いたい。

(草加氏)

施設の規模によって変わってくると思うが、兵庫県立芸術文化センターはチケットを売り切る劇場と呼ばれている。また、ホールとしては約2,000席だが、施設として友の会の会員数を6万人持っている。期待するコンテンツが常に並んでいるため、友の会がこれほど大きくなっている。貸館しか行っていないホールでは、何が公演されるか分からないため友の会はできない。来年もこういうことをやってくれるだろうか、年間これくらいのボリュームでやってくれるだろうかというのがあるため友の会に入るのであって、コンテンツが無ければ友の会には入らない。また、行政が文化政策を成長戦略として位置付けているかが大きなポイントになる。文化をやることがまちの成長戦略になると位置付けることが重要であり、集客やにぎわいを作るためにはいくらかの投資は必要になる。この投資は文化投資をしているのであって、赤字補填をしているのではない。文化芸術を観たことの無い人たちに素晴らしいものだということを伝えていく投資であり、文化が盛んなまちとしてみてもらえるように位置付ける成長戦略が必要であると考えている。

(石井副参事)

市場が拡大していく地域への波及効果や経済効果はどうか。

(笹井氏)

郊外の大規模な野外フェスは県外からの宿泊や飲食費等の経済波及効果だけでなく、地域のイメージアップにもなっている。横浜アリーナの波及効果は409億円という数字が出ており、税収入も多少貢献している。規模にもよるが、年間大勢の方が地域にやってくるため、周囲に飲食やショッピングが行われるような仕掛けを上手く作っていけば波及効果も期待できる。

・その後、以下のとおり質疑があった。

(五味委員)

中野には美術館がない。欧米では簡易な展示場の脇でジャズを演奏しており、将来こういうやり方も増えていくと思う。ここ数年で公演のやり方も変わってきているため、簡易な展示場が必要だと私は思うがどうか。

(草加氏)

展示施設は劇場と相性が悪くはない。しかし、限られた中でどう作っていくかは優先順位を決めざるを得ないため、可能であれば充足させるが機能を削ってまで作るものではないと思う。第1に何を整備するかプライオリティを決めるのが重要である。

(笹井氏)

劇場・ホールを作っても365日ライブ・エンタテインメントで埋まる訳ではないので、色々対応できる多様性があるものにした方が良くと思う。今まで通りのものもありつつ、新しいものが生まれてくるのは間違いない。

(佐々木委員)

中身としてここにどんなニーズがあるのか。中野区の行政では区民、区外の人に愛されるようにアイラブ中野と言っていた。また、まちづくりの基本として中野区が言っている起創展街という言葉がある。これを作る拠点として駅前の中心市街地がある。お話でもあった新しいものを作り出して、長い間展開していきける施設にしないといけない。アイラブ中野を作り出す施設、起創展街を具体化する施設はどんなものが考えられるか。また、中野区は20～30代の単身者の比率が高い。この辺を活かすにはどんなことをしたらいいか。アリーナを複合施設として、2000人と3000人とか劇場とホールと一緒に作ることはできないのか。

(草加氏)

中野区の人口が32万人くらいで東京都(23区)が927万人くらいだと思うが、1万人のアリーナをもしも作る場合に32万人で埋めるのを考えるのではなく、最低でも927万人を対象にして、更には近県の人口を含めて施設を考えていくべきだと思う。東京ドームを考えても、ロックコンサートをやっているだけではなく、インフラとして野球をやっている。それから、色々なイベントもやっており、形は野球場だが色々なことができる。ライブ・エンタテインメントだけでなく、色々なコンテンツが入れることを想定しつつ器を作っていないと稼働率を高くするのは難しい。

(笹井氏)

現在、各地で都市再開発を行っているが、中野は立地的な優位性があったりサンプラザというブランドあったりする。新しい集客交流施設は中野らしさというか、他とは違う特徴を持たないと区民に愛されないと思う。20～30代が行くライブ・エンタテインメントは50～60代が行くものとは当然違う。今の20～30代が50代になった時、いきなりクラシック音楽や寄席に行ったりはしないと思う。市場自体も変わってくると思うので、その辺りを考慮して考えていく必要がある。

5. その他

事務局より事務連絡があった。

6. 閉会

正午に閉会した。

以上